

日本人はなぜ
考えようとしないのか



福島原発事故と 日本文化

Niigata Nobukazu
新形信和

原発事故の根本原因は
現代日本文化にある！

福島原発事故はなぜあのような大惨事になったのか？
主語のない日本語、日本庭園の構造、絵画・仏像など、
一見迂遠と思われる日本文化、日本人の精神構造の分析から、
この大事故を徹底考察する。

日本人はなぜ 考えようとしないのか

福島原発事故と日本文化

新形信和

新曜社

はじめに

東日本大震災から三年半が過ぎました。あの震災からうけた三つの衝撃を忘れることができません。地震による甚大な被害もさることながら、沖から襲ってきた圧倒的な高波に、係留されていた漁船も、家も、電柱も、車も、すべてのものが呑み込まれ、押し流されていった津波の光景は衝撃的でした。また、福島第一原子力発電所の原子炉の建屋たぐが爆発し、一号機、三号機、二号機がつぎつぎにメルトダウンするにいたった恐怖感をともなった衝撃、これが第二の衝撃です。そして第三は、事故にいたるまでまかりとおっていた「原子力発電所は安全である」という神話が破綻して、その内実がどのようなものであったのかが明らかになりましたが、神話を構成していた事態のあまりのずさんさに衝撃をうけたことです。三年半という時間は過ぎましたが、福島原発事故は、被害を受けた人たちにとってそうであるように、過去の出来事ではなく、今なお現在の出来事です。

この第三の衝撃がきっかけとなって、比較思想・比較文化論が専門のわたしは、同じ過ちを繰り返さないためには、あまりにもずさんなこのような事態がどのようにして生じたのかを解明する必要があると考えるようになりました。また、そのようなしきたりで、原子力問題に素人のわたしでも、

福島第一原発事故にかかわりを持つことができるのではないかと思っただけです。すでに、国会の「東京電力福島原子力発電所事故調査委員会」の黒川清委員長が、英語版の報告書（要約版）の冒頭で、福島原発事故の根本原因は、われわれの「反射的に従順であらうとする心性、権威を疑うことへの抵抗感、「計画通りであること」への愛着、集団主義、そして島国根性」などの「日本文化に深く根を下ろしている習性にある」（日本語訳は筆者による）、つまり、事故の直接的原因や間接的原因ではなく（直接的原因や間接的原因は原子力関係の専門家によって解明されるべきですが）、根本原因は日本文化にあると語っています。この発言は、西洋諸国や日本の多数の識者から、事故の原因究明を妨げる見解であり、ナンセンスであると強く指弾されました。しかし、黒川清委員長の指摘の方向性は正しいとわたしは考えています。問題があるとすれば、黒川清委員長の日本文化の捉えかたが、いささか紋切り型で表面的であったことにあると思われるのです。

わたしは『日本人の（わたし）を求めて——比較文化論のすすめ』という本を二〇〇七年に新曜社から上梓しました。この本で試みたのは、わたしたち日本人が日本を近代化するために明治以降ひたすら摂取することに努めてきた西洋文化と伝統的な日本文化とがいかに異質なものであるかということを明らかにすることでした。西洋文化の受け入れについては、夏目漱石が「現代日本の開化」という講演のなかで語っている、日本の近代化は、外発的であり皮相上滑りである、ということとばがよく援用されます。日本は、内発的に近代化を成し遂げた西洋のような、十分な時間的な余裕はなく、西洋が百年かかってやり遂げたことを十年でやらざるをえない、だから、内発的な経過

をたどろうとするには無理があり、どうしても皮相上滑りうわすべになってしまうというのです。日本の近代化が外発的で、皮相上滑りうわすべであるという漱石の指摘はまったくそのとおりであり、異論をさしはさむ余地はありません。しかし、漱石がこのように指摘したときの根拠となっているのは、(時間的)量的な問題であり、質的なことは、少なくともこの講演では、問題にされていません。わたしは、日本の近代化が外発的で、皮相上滑りうわすべであるのは、漱石がいうように、内発的な経過をたどるための時間的余裕がなかったばかりではなく(漱石がそのように指摘してから、すでに百年以上)の時が経過してはいますが、ますます皮相上滑りうわすべになっているのではないでしょうかと、受け入れようとした西洋文化と伝統的な日本文化との異質性にわたしたち日本人が無自覚であったことに由来するであろうと考えて、前著を書きました。

福島原発事故を経験して考えたこと、それは、事故の根本原因が現代の日本文化にあるのではないかと疑いをいだきながら日本人の問題をもう一度徹底的に検証してみようということでした。自己のありかたについて、すなわち、このような事態に立ちいたらざるをえなかった自己の欠点を、じゅうぶんに自覚しそれを改めることができなければ、将来また同じような事態を繰り返すことになるのではないでしょうかと。

この本の第一部(第一章から第八章まで)は日本の文化について語られています。また、第二部(第九章から第十一章まで)では福島第一原発の事故にかんして考えたことが語られています。第一部から順に読み進んでくださっても、あるいは、第二部をまず読んでから第一部に戻っても、自

由な読みかたをしてくださればよいと思います。ただ、一つだけ申し上げておきたいことがあります。それは、この本を書くときにわたしは、学問や研究で普通行なわれるように、日本人の精神構造をたんに自分の外の対象とみなして分析したのではないということです。そうではなく、自分自身の主体の内部の問題として検討しようと心がけました。日本人の精神構造を自分の外の対象とみなすことによつて、その外に存在するものになり、対象としてとりあげた日本人の精神構造とは直接関係ないものになってしまう。難しそうなことをいいましたが、読者の皆さんに、この本に書かれていることを自分自身の内部の問題として受けとめていただけたら幸いであると申し上げたかったです。

目次*日本人はなぜ考えようとしなのか——福島原発事故と日本文化

第一部 日本人の〈わたし〉を考える

第一章 〈わたし〉について

「私」と「I」は異質である 15

「私」と「I」の異質性の自覚が欠如している 19

第二章 〈わたし〉はどこにいてるか——見るということ

〈わたし〉は中心窩のところにいる 25

マッハによる〈わたし〉のスケッチ 28

死にたいする対応のしかたで〈わたし〉のありかたが決まる 31

『暗夜行路』における〈わたし〉の消滅 34

第三章 世界の外に存在する〈わたし〉と世界のなかを自由に

移動する〈わたし〉——ルネサンスと日本の伝統的絵画

ルネサンスのパースペクティヴの視点 38

神にたいする信仰の直接化 44

日本の絵画における視点のありかた 50

第四章 〈わたし〉のありかたの違い

——ヴェルサイユ宮殿の庭園と桂離宮の庭園について

55

連続する視点——ヴェルサイユ宮殿の庭園 55

断片的で非連続な視点——桂離宮の庭園、絵巻、年号 63

第五章 〈わたし〉と〈わたし〉の出会いかた——挨拶について

71

西洋人の挨拶と日本人の挨拶 71

日本語における自分の称しかたと相手の称しかた 77

〈わたし〉と「私」との関係 82

第六章 日本人の〈わたし〉の位相——仏像と臨濟録

86

東大寺戒壇堂の広目天像 86

『臨濟録』の「目前」について 90

無我の位相 95

第七章 自己意識と自意識——主語(主体)について

100

「I see Mt. Fuji」——主語(主体)が存在する意識の構造 100

「自己意識」の確立——デカルトの「考える(わたし)」 106

「富士山が見える」——「自己意識」と「自意識」の違い 111

第八章 見立ての構造について

118

ふたたび見立てについて 118

日本語のなかの見立て 123

宗教も見立てによって成立している 128

ヴェルサイユ型知性と桂離宮型感性 133

河合隼雄の「中空構造」と見立ての文化論 137

日本人は自分のことを西洋人に見立てている 140

第二部 福島第一原発事故をめぐって

第九章 非連続で断片的な思考と〈わたし〉のありかたの問題

147

福島原発事故で露呈したもの 147

統一的な視点の欠如 151

〈わたし〉のありかたの問題 156

第十章 見立てに走る精神

予想される事態を直視しないことと精神の雑居的な二重構造 162

「現実的解決を心理的解決に置き換える」 167

「最悪のシナリオ」が消えてしまう思考回路」と空気の支配 172

見立てに走る精神 178

第十一章 「和魂洋才」方式の破綻

原子力規制委員会の新しい規制基準 181

日本文化と西洋文化の違いを自覚することの必要性 187

おわりに 192

あとがき 202

図版出典一覧 205

索引 210

装幀——虎尾
隆

第一部

日本人の〈わたし〉を考える

第一章 〈わたし〉について

「私」と「I」は異質である

書店で『私とは何か』というような書名の本を見かけます。この「私」ということばは、ヨーロッパ語の一人称代名詞（英語でいえば「I」）に相当するとみなされているようです（日本語には「私」「ぼく」「おれ」など、一人称代名詞とみなされるようなことばがいくつも存在しますが、「私」はその代表とされているわけです）。いったい、日本語の「私」は、英語の「I」（ヨーロッパ語の一人称代名詞、たとえばフランス語の「je」、ドイツ語の「ich」などを英語の「I」で代表させます）と等しいのでしょうか。よく考えもしないまま、等しいとみなしているのではないのでしょうか（さきまわりしていえば、「等しいとみなしている」というこの文章は、日本人は日本語の「私」を英語の「I」に見立てている、ということの意味しています）。いったい、日本語の「私」と英語の「I」は等しいといえるのかどうか、検討してみることによらう。

英語の「I」は古代からつねに単一で一貫して使用されてきましたが、日本語には「私」「ぼく」

「おれ」など複数の語が存在し、相手との関係や状況に応じて使い分けをします。「私」は複数の語のなかの一つにすぎません。「私」に相当することは、古代から現代まで数えてみると五一あるという研究もあります（辻村敏樹『敬語の史的研究』）。「私」はその一つにすぎないのです。これだけでも「私」と「I」が等しいとはとてもいえないでしょう。

さらに、たとえば、二人の人物がどこかに行くかどうかという話をしているときに、一方が「行く?」と尋ね、尋ねられた方が「行かない」と答えたとします。これは自然で完璧な日本語の文です。この対話の答えの「行かない」に相当する英語は「don't go」であり、主語の「I」を欠かすことはできません。しかし、日本語では「私」をいわないのです。

ところが、日本の学校では「日本語の文は主語と述語とから成り、主語は省略されることが多い」と教えます。これは英語などのヨーロッパ語の文法で日本語を説明しようとして、日本語の文にも英語のように主語が存在すると考えているのです。しかし、日本語では主語がなく、述語だけの文がよく普通に用いられるものですから、主語は省略されることが多い、と説明するのです。これは間違った説明です。ヨーロッパ語の文法に存在する主語の概念を国文法に導入したのは、金谷武洋がのべているように、国語辞典の『言海』をつくった大槻文彦です（金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社選書メチエ）。その大槻文法が明治政府（文部省）によって採択されて政府公認の規範文法として定着したのです。

しかし、日本語は主語なしに文が成立します。「行かない」という答えはこれで完全な日本語の

文です。省略されたという主語を無理に補おうとすれば「私は行かない」とでもなるのでしょうか、この文は「行く」ことを単に否定しているわけではありません。「あなた」は行けばいいじゃないか、というニュアンスをもつ別の文なのです。英語は主語の「I」があるからといって、そのようなニュアンスを帯びることはありません。「I」がなければ文が成立しないからあるだけです（「あなた」は行けばいいじゃないか、というニュアンスをもたせるには、「I」に特別なアクセントを置いて発音するでしょう）。このように、日本語の「行かない」という文には「私」は存在しません。英語の「I don't go」では「I」は不可欠です。英語の「I」と日本語の「私」は明らかに違っています。

「ぼく」や「おれ」などの代表として「私」をとりあげてお話ししてきましたが、「私」が英語の「I」と等しくないのであれば、「I」に相当する日本語は存在しないということになります。そこで、やむをえず、「I」に相当することばを日本語で〈わたし〉と表記することにします。〈わたし〉ということばは、主体や主語を意味します。この〈わたし〉は日本の伝統的文化のなかで、どこに、どのように存在しているのでしょうか。ことばが存在しないということは、どこにも存在していないことでしょうか。そうだとするならば、日本人にとって、「私」は存在しても、〈わたし〉は存在しないということになるでしょう。

このようにいえば、そうではない、日本語の「私」は、英語でいえば「I」を兼ねているのだと反論する人が必ずでてくるでしょう。「私」をヨーロッパ語の一人称代名詞に相当することばとし

で使用している人もたくさんいるでしょう。しかし、そのような人たちには、普通、ヨーロッパ語の素養があつて、「私」ということばに「I」や「je」や「ich」などの響きをこめて使用しているつもりなのです。そうではなくとも、明治以降、「私」という日本語を、ヨーロッパ語の一人称代名詞に相当することばであると思ふようになってから、すでにかなりの時間が経過しています。現在では、英語でいえば「I」と日本語の「私」とは重なる部分ないし側面があるかもしれませんが。

しかし、いまお話ししているのは、そもそもの話です。両者は、異なつた構造をもつ別の働きをしていたことばなのです。明治以降、日本人は学校で、英語などのヨーロッパ語の文法を下敷きにしてつくつた日本語文法を教えられました。そのような日本語文法の根底にあるのは、日本語の「私」がヨーロッパ語の一人称代名詞（英語なら「I」）に相当することばであるという基本的な誤解です。英語（ヨーロッパ語を英語で代表させているわけですが）の文法で日本語を説明できるためには、英語と日本語がもつていることばとしての構造が同質なものでなければなりません。もし両者が基本的に異質なものであれば、そのような説明は成り立たないはずです。英語の文法を下敷きにして日本語を説明しようとするのは、英語の構造にも、日本語がもつ構造にも無頓着で無自覚な説明にすぎないのです。日本語の「私」を英語などの一人称代名詞と同じものであるとみなすことによつて、日本語とヨーロッパ語がことばとしてもつ、それぞれの基本的な構造がわからなくなるばかりではなく、日本文化とヨーロッパ文化そのものがその根底のところで見えなくなるかもしれません。

「私」と「I」の異質性の自覚が欠如している

この章の冒頭で、『私とは何か』というような書名の本がありますが、その「私」は、英語でいえば「I」に相当するとみなされているのでしよう、とのべました。この書名をつけた人は「私」を英語でいえば「I」のつもりでいるのでしよう。そこまではいいのかもしれませんが。しかし、日本語の「私」ということばは、「わたくし」と発音すれば、目上の人にたいして、あるいは、改まった場面で、自分のことを称するときに使われる丁寧なことばであり、「わたし」と発音すれば、「わたくし」よりも、もっとくだけた一般なことばであると説明されています。しかし、たとえば「わたし」と発音される一般的な場合であっても、このことばは状況に依存して使われることばなのです（英語の「I」は状況に依存せず、状況から独立しており、つねに、同一の「I」が一貫して使われます。詳しいことは、またさきでお話するつもりです）。この「わたし」ということばは、女ことばとして普通に使われることばですが、男が使う場合には、目上の人にたいして、あるいは、改まった場面でも使うことができます。しかし、同僚や友人などにたいして、また、自分の妻にたいしては使われません。その場合には、「わたし」ではなく、「ぼく」や「おれ」などというのが普通でしようし、近所の子供にたいしては、「わたくし」ではなく、たとえば「おじさん」などというでしよう。日本語の「私」ということばは、このように状況に依存して使われる、いいかええますと、状況から生まれてきたことばなのです（図1は、鈴木孝夫が、年齢四十歳の小学校の先生を例にとり自分のことをどのよう¹に称するかを示したものです。「自己」にむかう矢印が自分の称

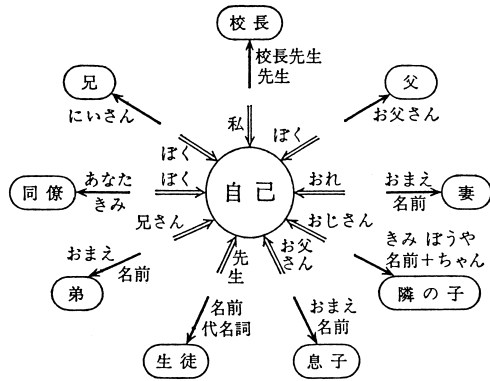


図1 鈴木孝夫の自称詞の表

しかたを、相手にむかう矢印は相手の称しかたを表わしています。

そのような日本語の「私」ということばを、英語の「I」のつもりで使用するということは、つぎのような相容れない二重のしかたでこのことばを使用していることを意味します。すなわち、一方では、「私」ということばを、状況に依存せず、独立した英語の「I」のつもりで使用しているということ、また他方では、実際の生活の場で、状況に依存した日本語として使用しているということです。問題は、そのことに無自覚のまま、臨機応変に使い分けているということにあるのです。

阿部謹也は、日本人は世間に依存して生きているのに、社会のなかで生きているかのような幻想をいだいている、といっています（『教養』とはなにか『講談社現代新書』）。世間ということばは明治以前から日本に存在していることばであり、生活の場としての「世の中」を意味します。それは初めから与えられているものであって、変えることのできないものです。それにたいして、社会とというのは、ヨーロッパの近代になって、自立した個人の集合体を意味することばとして成立したものであり、個人の意志の総体によって、どのような社会を

つくるかを決めることができますし、変革することもできるものです（阿部謹也『ヨーロッパを見る視覚』岩波書店）。明治になって西洋から入ってきた新しい事物はそれまでの日本にはなかったものでしたから、それらの新しい事物を指す新しい日本語をつくらねばなりませんでした。こうしておびただしい数の新しい日本語がつくられました（いわゆる翻訳日本語です）。社会という日本語もその一つであり、英語の *society* にたいして明治になって新しくつくられたことばです。

高島俊男は、そのような翻訳日本語について、「形はたしかに日本語だが、その内容、その実質は西洋語なのである」といっています（『漢字と日本人』文春新書）。日本人は世間に依存して生きているのに、*society*（社会）のなかで生きているつもりでいる、いいかえますと、状況に依存して生きているのに、状況から独立して生きているつもりでいるという幻想が生じるのは、日本語の「私」ということばを使いながら状況に依存して生きているにもかかわらず、英語の「I」のつもりで状況から独立して生きているかのような錯覚が根底に存在しているからなのです。阿部が「幻想をいだいている」というように、錯覚であるという自覚が欠如しています。

実社会のなかでひたすら生きている実業家や政治家にとって、世間は間違いなく存在するものなのですが、社会の存在感は稀薄なようです。企業の社長や大臣などが、自分が引き起こした事件